



避難所設営の実習でパーティションを組み立てる生徒たち
＝ 5 月（好間中提供）

防災担い手育って

東日本台風6年

本県などに甚大な被害をもたらした、関連死を含め40人が犠牲となった東日本台風の上陸から12日で6年。好間川の氾濫で広範囲が浸水したいわき市好間町にある好間中では、避難所運営のノウハウを学ぶなど未来の防災の担い手を育成する教育が行われている。生徒は自らの被災経験も踏まえながら、支援される側から支援する側になろうと学びを深めている。

「避難を受け入れる側になつて初めて、受け入れには小さな気遣いが大切なのだと気付いた」。岡本証志さん(15)は、3年生が取り組んだ避難所運営実習の感想を語った。

実習は5月、体育館で行われ、生徒は避難家族ごとに空間を仕切るパーティションや段ボールベッドを組み立て、受け付け業務も担った。岡本さんは実習を通じて感染症患者がいる家庭は館内の特定のエリアで受け入れられたり、犬と一緒に避難してきた人には屋外にゲージを置くなど細かい対応の必要性を感じたという。実習には地域の保育園児も参加。紺野颯馬さん(15)は「園児はとても緊張していたので、言葉が伝わるよう注意を払った」と振り返った。

同校は東日本台風を受け、2022年度から総合的な学習の時間を活用して防災教育を始めた。将来の地域防災の担い手を育成しようと、地域の自主防災組織の関係者も積極的に協力している。23年9月の記録的豪雨で同校が避難所となつた際は、防災教育を受けた生徒が開設の作業を手伝う姿も見られたという。

被災直後のいわき市好間町で行われた救助活動の様子。2019年10月13日



いわき・好間中 避難所訓練、生徒「助け合う」

た生徒が開設の作業を手伝う姿も見られたという。渡辺向日葵さん(15)は6年前、自宅が川沿いにある小学生だった渡辺さんは大きな不安を感じていたが、避難所の受け付けの人に優しく話しかけられ、少し安心することができたという。「その経験をきっかけに、知らない人同士でも助け合つことが大切だと考えるようになった」。実習では、相手に優しくすることを心がけながら取り組んだ。

吉野敦広校長は「中学生が防災を通じて地域に目を向けることができている。地域の未来をつくる活動と言えると思う」と防災教育の意義を語った。

(須田 純一)

▲10月11日 福島民友新聞掲載

好間中生の避難所運営実習は、どのように行われていますか？

岡本さん、紺野さん、渡辺さんは、それぞれどんなことに取り組み、どんな気づきがありましたか？

避難所運営訓練について、どのような内容や気づきがあるか調べ、支援する側に立って自分のできることをまとめてみましょう